

きらめきに包まれるまち ～今に息づく金沢の金箔～ (金沢市)

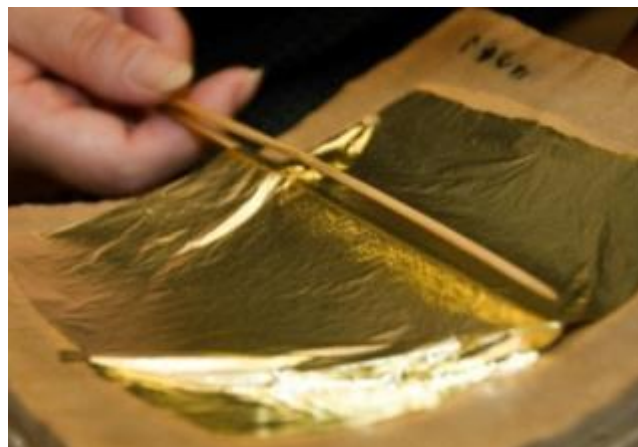
金沢の地名は、兼六園にある「金城霊沢」が、芋掘り藤五郎という青年が掘った山芋についた砂金を洗った泉であるとの伝説が由来といわれている。

金箔は、金を打ち延べて約1万分の1mmまで薄く延ばし、それを、建築、彫刻、美術工芸、日用品にわたり活用する工芸素材であり、現在、日本の金箔は、ほぼ全てが金沢で製造されている。

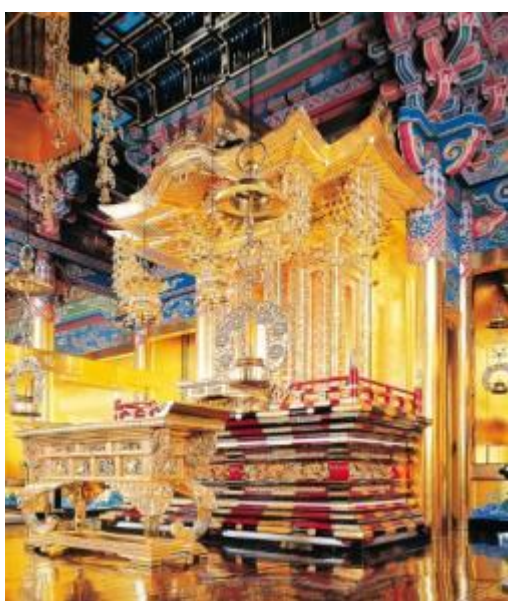
金沢の金箔は、文化財の建造物や美術工芸品、現代にも伝わる伝統工芸ばかりでなく、日常生活の様々な場面でも使用されており、人々の暮らしはきらめきに包まれている。



金城霊沢



縁付金箔製造



本願寺金沢別院



加賀とびはしご登り

加賀の白山と水の文化（白山市）

日本三名山の白山は、越の大徳と讃えられた泰澄によって養老元年（717）に開山されたとされる国内屈指の山岳信仰を持つ霊山である。万年雪を抱き、様相が神々しいことから女神に例えられ崇められており、この霊峰を源流とする手取川は、山間の谷間集落をとおり、平野へ出て扇状地を形成し、そして日本海へ注いでいる。

人々は、古くからこの霊山を崇め（①祈る）、この霊山から出ずる水を利用し（②使う）、この水より産業を発展させ（③醸す）てきた。



白山山頂遺跡群



白山比咩神社本殿



手取川七ヶ用水施設群



白山菊酒蔵元

能登半島を彩る深紅の花 ～のときりしまつつじ古木群～

〔 七尾市、輪島市、珠洲市、羽咋市、志賀町、
宝達志水町、中能登町、穴水町、能登町 〕

能登半島の里山里海景観に古くから彩を添えてきた「のときりしまつつじ」は、毎年5月上旬には美しい濃赤の花が、秋には赤色の紅葉が人々の目を楽しませる。

きりしまつつじは、近世に関東で栽培が流行し、能登には関東（江戸）や関西から運搬されたといわれており、能登半島には、現在も樹齢100年を超える古木が500株以上も存在し、日本国内でも稀に見る規模で古木が現存している。

「のときりしまつつじ」は、古くから能登の寺社や旧家の庭園などに植えられ、花を鑑賞する文化があったことを示し、能登の人々の拠り所となっていたことを物語る。



大谷ののときりしまつつじ



五十里ののときりしまつつじ



芦田家ののときりしまつつじ



喜多家住宅